

報告

国家試験受験学習に関する調査

山本 双一¹⁾, 酒井 寿美²⁾, 石元美知子³⁾, 石川 裕治⁴⁾

Investigation about the study to take a state examination

Soichi Yamamoto¹⁾, Sumi Sakai²⁾, Michiko Ishimoto³⁾, Yuji Ishikawa⁴⁾

要 旨

国家試験受験対策準備と、4年次生への指導の参考とすることを目的に、国家試験受験学習の経験について、高知リハビリテーション学院の平成13年3月卒業生を対象にアンケート調査した。

卒業生で国家試験受験者である、理学療法学科39名、作業療法学科31名、言語療法学科17名のうち、回答が得られたのは、理学療法学科18名、作業療法学科19名、言語療法学科9名であった。

結果は、学院授業や特別講義について、理学療法学科と作業療法学科ではその内容は国家試験を考慮したものではなかったと捉えている。臨床実習期間中はほとんど国家試験については意識下にはない。グループ学習という勉強方法については、「どちらとも言えない」が最も多く、グループでの学習の進め方は、「過去問題の解答」や「学院模試の解答」に、ほとんどの時間を使っていた。グループ学習の効率が悪い原因は、「グループ内のまとまりがない」「各人の勉強方法が違う」「グループ内で各人の学習の進行度が違う」であった。自己学習の取り組み時期は、受験の2か月前からで、自己学習時間は1日に平均で、2時間以上で4時間以内が多かった。自己学習内容は、「模擬試験問題の解答調べ」「教科書などの再学習」が中心であった。学習習慣が無く苦痛であったとしたものが半数以上であった。模擬試験回数については、現回数程度が適当と回答した。

Abstract

For the graduate who graduated from the Kochi rehabilitation institute in March in 2001, questionnairing was conducted on the experience of the state examination learning. It is a purpose to make this to be a reference of state examination countermeasure preparation and guidance to 4 graders.

It is graduates of 39 persons of the physical therapy family, graduates of 31 persons of the occupational ther-

1) 高知リハビリテーション学院 教務部

School affairs part, Kochi Rehabilitation Institute

2) 高知リハビリテーション学院 理学療法学科

Department of Physical Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

3) 高知リハビリテーション学院 作業療法学科

Department of Occupational Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

4) 高知リハビリテーション学院 言語療法学科

Department of Speech, Language and Hearing Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

apy family, graduates of 17 persons of the speech therapy family who took the state examination, after it graduated from the Kochi rehabilitation institute. In this inside, the answer was got from 18 graduates of the physical therapy family, 19 graduates of the occupational therapy family, 9 graduates of the speech therapy family.

Graduates of physical therapy family and occupational therapy family were catching state examinations, when usual class and special lecture did not consider it. During the clinical training period, it was not under the consciousness on the state examination. On study method of the group learning, there were most many "it can not be called which". It was used in "answer of the past problem" and "answer of the simulation test" in the time of the group learning. Group learning there everyone study method group everyone be. As other cause, they are that everyone study method differs and that the progress of everyone learning varies in the group. It was from before 2 months of the examination in the time which tackled the self-learning. "Answer investigation of the simulation test problem" "relearning such as the textbook" was main for self-learning content which was for the 2 hours for 4 hours first in the time of the self-learning. Since there is no learning habit, the person over the half was the psychological distress the examination and study. On the simulation test frequency, it was replied that as frequency done at present was adequate.

〈はじめに〉

高知リハビリテーション学院は理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の養成校であり、卒業により、理学療法学科学生には理学療法士国家試験受験資格を、作業療法学科学生には作業療法士国家試験受験資格を、言語療法学科学生には言語聴覚士国家試験受験資格を与える。各学科とも、履修年限が4年間で、それぞれの学科定員30名である。4年次生では、前期に臨床実習を行うが、理学療法学科と作業療法学科は9月末までの臨床実習となる。言語療法学科は8月には臨床実習を修了する。10月からの後期には、授業科目としては、卒業研究などのごく一部の単位を残すのみである。それぞれの学科では、10月からは、主として、卒業論文の作成と発表、就職活動、そして国家試験勉強となる。国家試験対策として、その勉強法は、理学療法学科と作業療法学科は、7～8名の少人数単位でのグループ学習を主としている。グループ分けは10月に行うが、グループ勉強の開始時期やその頻度、方法や内容などについては、グループ内での相談による計画に従い、学生の意向によっている。模擬試験は12月から国家試験前までの期間で10回程度行っている。言語療法学科では、理学療法学科・作業療法学科とは学習方法は一致し

ない。理学療法学科と作業療法学科では、臨床実習が10月初旬で終了となり、10月以降は学院内での授業となるが、4年次生時の後期は卒業論文作成と国家試験勉強に当てられる。グループ毎の学習は、各グループにより幾分かの開始時期の違いはあるが、12月頃から始まる。模擬試験は、12月より10回程度となる。理学療法士・作業療法士国家試験期日は3月初旬である。言語聴覚士国家試験日は3月末である。言語療法学科の臨床実習は8月中旬に終わる。その後に学院での授業となる。国家試験は3月末である。なお、言語療法学科は、国家試験は平成13年が第3回で、本学院としては初めての受験となる。合格者数は、理学療法学科全員、作業療法学科30名、言語療法学科12名であった。

国家試験勉強の方法として、グループ学習法の是非や、言語療法科での学習方法を探るため、調査を実施した。受験経験から得られた貴重なアンケート結果は、今後の国家試験受験対策準備と、後輩である特に4年次生への指導の参考資料とすることを目的とした。

〈方法〉

高知リハビリテーション学院の平成13年3月卒業

表 アンケート項目要旨

1. 学院授業が国家試験受験に役立ったか、またその科目は？
2. 臨床実習期間中の国家試験受験学習は？
3. グループ学習の開始時期と進め方、またその感想は？
4. 特別講義は国家試験勉強に役立ったか？
5. 自己学習の開始時期、学習時間、学習内容は？
6. 受験心理について？
7. 模擬試験の実施時期と実施間隔、回数は？
8. 学生の学習経験と、受験心理？

生は理学療法学科39名、作業療法学科31名、言語療法学科18名で、国家試験受験者は、理学療法学科39名、作業療法学科31名、言語療法学科17名である。この国家試験受験者全員87名に対し、平成13年6月に「国家試験受験対策アンケート」を郵送にて行い、学院での国家試験受験対策を経験しての感想や意見を求めた。アンケートの内容は、学院での授業と国家試験の関連、特別講義との関係、臨床実習期間中の国家試験勉強、グループ学習形式とグループ学習内容について、自己学習時間とその内容、模擬試験について、などとした(表)。

〈結果〉

回答者数は、理学療法学科18名、作業療法学科19名、言語療法学科9名の合計46名である。回収率は、理学療法学科46%、作業療法学科61%、言語療法学科53%、合計平均53%である。

学院授業は国家試験受験に役立ったかは、大いに役立ったが言語療法学科のみの3名、一部役立ったのは37名、ほとんど役立たなかったは理学療法学科と作業療法学科のみで6名で、役立った科目は、解剖学、生理学、また、理学療法学科・作業療法学科では運動学を含めた、基礎科目が多く、次に学科ごとの専門科目(精神運動領域)が多かった。それがどの程度であったかについては、「多くの時間を割いた」と受け取った者は少なく、「折に触れて話が及んだ」と「話に出てきたことがある」がほとんど、

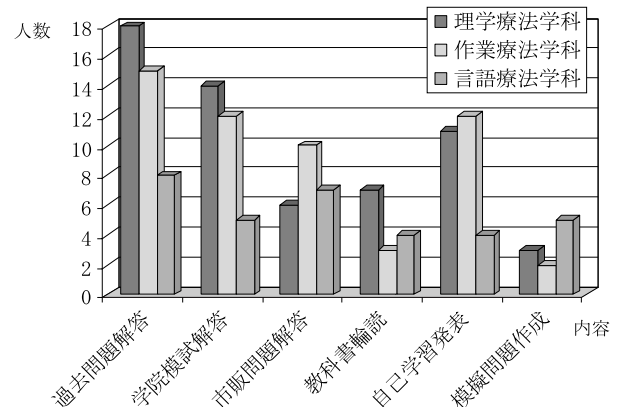


図1 グループ学習の内容

うち「話にでたことがある」が多かった。今後、授業に国家試験を考えた内容を含めることが必要だと思いますかについては、「国試問題を中心にする」はほとんど無く、「一部に含める」がほとんどであった。必要ないとの意見も少しはあった。このとき、「どのような事項や内容を希望しますか」には、問題の出題傾向を教えてほしいとの意見が多かった。特別講義については、学科によりその目的が違ふことで、アンケート結果もそれを反映している。理学療法学科・作業療法学科では、ほとんど国家試験勉強に役立っていない。言語療法学科では、役立ったとする意見が多かった。

臨床実習中にスーパーバイザー等から国家試験の学習を動機づけられましたかについては、ほとんどなしであった。「実習期間中に国家試験受験学習をしましたか」についても、臨床実習期間中はほとんど国家試験については意識下にはない。

グループでの学習の進め方は、「過去問題の解答」や「学院模試の解答」に、ほとんどの時間を使っている(図1)。後輩へのアドバイスとして、グループでの学習方法は、「過去問題の解答」「学院模試の解答」が、やはり望ましいとしている(図2)。グループ学習という勉強方法については、「効率がよかった」との意見もあったが、「どちらとも言えない」が最も多く、「効率が悪かった」との意見は少なかった(図3)。効率が悪かった原因は、「グループ内のまとまりがない」との意見が作業療法学科で多かつ

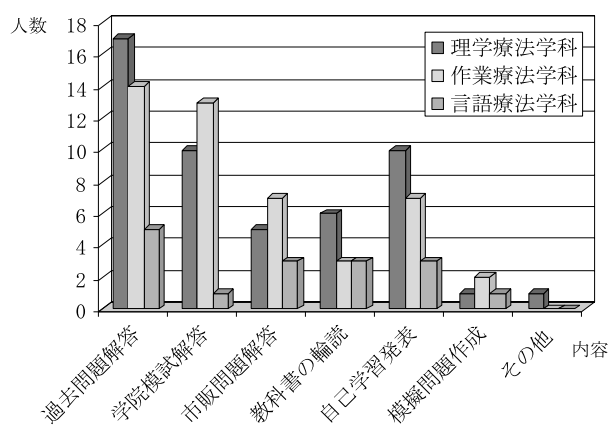


図2 後輩に勧めるグループ学習内容

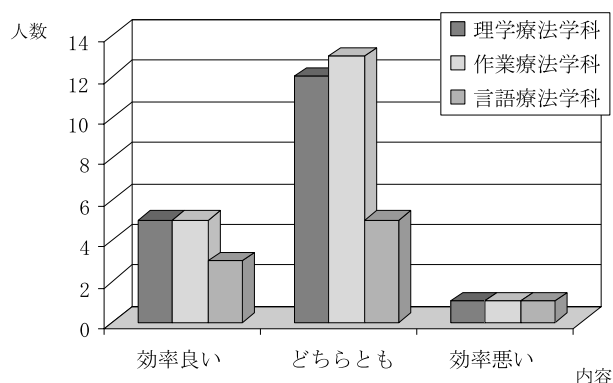


図3 グループ学習の効率

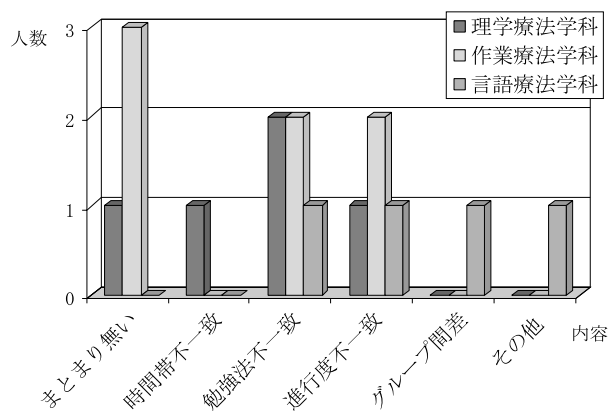


図4 グループ学習の欠点

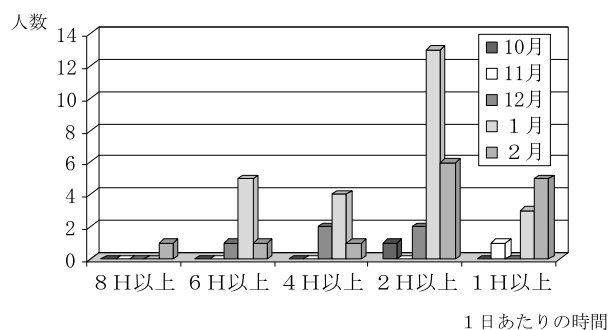


図5 全学科学生の自己学習時間と学習開始時期

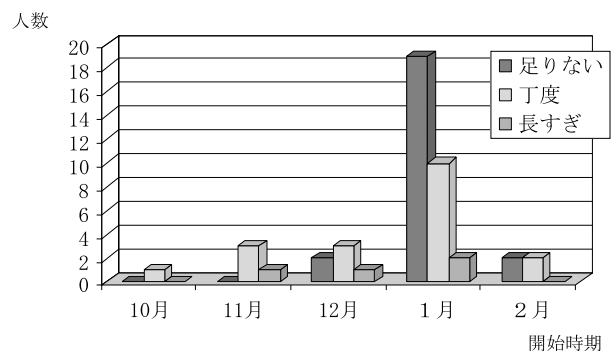


図6 全学科学生の学習開始時期と感想

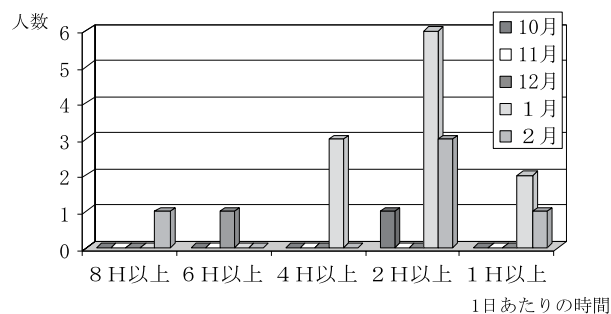


図7 理学療法学科学生の自己学習時間と学習開始時期

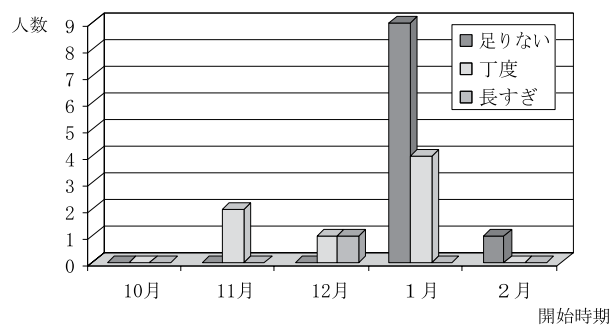


図8 理学療法学科学生の学習開始時期と感想

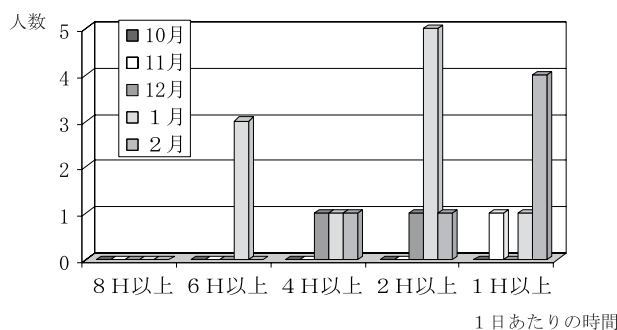


図9 作業療法学科学生の自己学習時間と学習開始時期

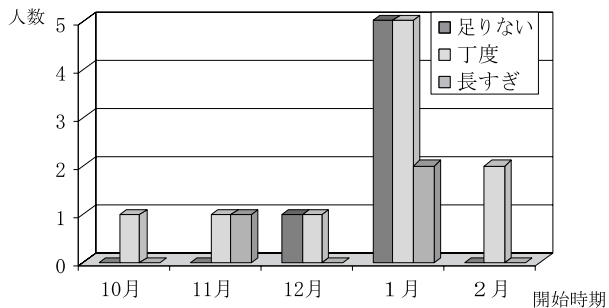


図10 作業療法学科学生の自己学習開始時期と感想

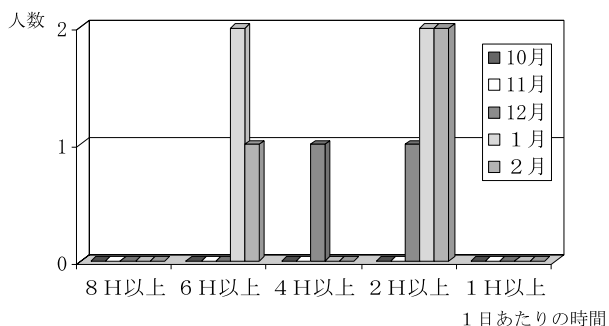


図11 言語療法学科学生の自己学習時間と学習開始時期

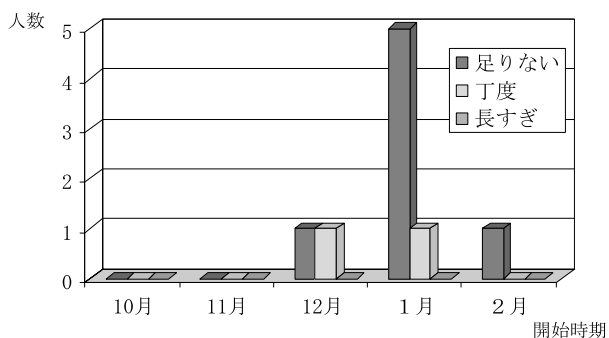


図12 言語療法学科学生の自己学習開始時期と感想

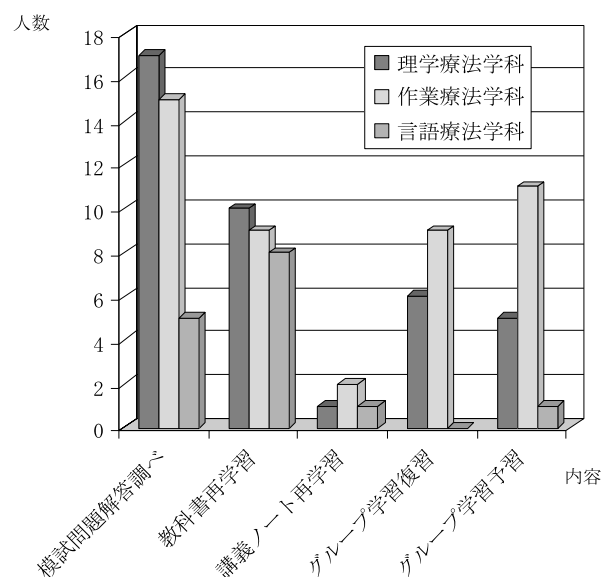


図13 自己学習の内容

た。「各人の勉強方法が違う」「グループ内で各人の学習の進行度が違う」との意見が多い(図4)。

自己学習の取り組み時期は、1月からで、言語療法学科では2月からも多かった。自己学習時間は1日に平均で、2時間以上で4時間以内が最も多かった(図5～図12)。自己学習内容は、「模擬試験問題の解答調べ」が最も多く、「教科書などの再学習」が次いで多かった(図13)。学習習慣が無く苦痛であったとしたものが46名中の25名と半数以上であり、それぞれの学科とも平均している。役立った参考図書は、理学療法学科・作業療法学科では『国試の達人』、言語療法学科では『言語聴覚士指定講習会テキスト』であった。

受験にあたっての不安はあり、模擬試験とは違って、本番では問題を難しいと感じる者が多かった。プレッシャーを掛けないでほしいという意見もあった。模擬試験回数については、もっと多くとの意見も少数あったが、ほとんどの者は現回数程度が適当と回答している。

〈考察〉

国家試験は、それぞれの資格の最低基準を問うものであるが、認知領域が主で、情意領域をみることはできず、精神運動領域についてもごく限られた範囲のものとなる。臨床を考慮しても、筆答諮問である以上、知識を問うことが中心とならざるを得ない。したがって、学生は国家試験受験学習で基礎医学の知識修得に重点をおくことになる。これは、それまでの学院での授業や、臨床実習での学習と経験とは違った内容を求められていることになる。当然に、学院での授業カリキュラムは国家試験を照準としたものでなく、基礎医学偏重ではない。また基礎医学は低学年時に学院授業があるため学生のモチベーションが低いこともある。高学年時に実施する特別講義も、特に理学療法学科・作業療法学科については、国家試験を意識しない内容で企画している。したがって、4年間に積み重ねた知識のみでは対応できず、国家試験受験対策としての学習の機会をとる必要がある。高知リハビリテーション学院は、4年

制であり臨床実習は4年次生の前期に終了し4年次生の後期にはカリキュラム上での時間的余裕があるため、この期間を国家試験学習に振り向けることができる。理学療法学科と作業療法学科は、国家試験学習にグループ学習形式を取り入れている。講演のように要点を学生に伝える一方的な教授と違い、グループ学習は、グループメンバーの話し合いにより学習内容や方法を決定して進めるため、全員の理解が得られてから次の段階に進むことから、効率は悪い。また、グループメンバー間に知識の差があり、メンバー全員が一定レベルに達してから次へ進行することは、知識が十分な者にとっては不満を持つことになる。しかし、学習習慣が無いメンバーにとっては良いモチベーションとなり、不足の知識が明確化されて、自己努力にて学習を一定のレベルに引き上げることができる。アンケート結果から、学生はグループ学習を重視していて、自己学習はグループ学習を補うものとしている傾向が見て取れた。グループ学習内容としては、過去の試験問題や模擬試験問題から出題傾向を探り、知識不足の面を補って

いくのが当然であろうし、自己学習よりもグループ学習に時間をかけて重きをおいているため、自己学習はグループ学習での予習と復習をする傾向にあるのは必然である。アンケートの回答の中に意見記述もあったが、グループ学習における難しさは、グループ内でのまとまりと、グループでの学習計画と善し悪しと実行の是非によるところが大きい。国家試験学習の期間は2か月間との結果であり、これでは短かったとの意見も少数あるものの、今後の国家試験受験対策を計画していくうえで、参考となる。模擬試験については、現在行っている週一回でほぼ3か月前からの約10回程度の回数が適当との結果である。模擬試験は、試験に慣れることも目的ではあるが、自己の不勉強なところや不得意な部分が把握できることもある。受験の心得については、模擬試験の慣れや、学習度が関係するであろう。

なお、言語療法学科については、回答者数が少なく、また無記名にて合格者・不合格者別の意見が区別できないため、国家試験不合格の原因を特定するには至らなかった。